

・和泉次郎（新潟県）

左手が

刃物をもっていなかった事を

右手はその後しった

記述の文体によって認識のずれが発覚する左手と右手。時系列が明らかにしてゆく事実は、後戻りのできない出来事です。すべては後の祭りなのだ。

・上原翔子（山梨県）

一月の夜に光る赤と緑のように  
濃がぐずぐずとだらしなく

クリスマスシーズンを抜けた赤と緑の電飾は、過ぎた時間の痕跡としてのみ存在している。傷ついたという証明としてのみ濃む私の身体のぐずぐず。

・織田 航平（北海道）

緑草

足の踏み場もない部屋に

僕にしては、お金があるし

僕が寝て起きて食べるもので散乱する部屋と、生き物が寝て起きて食べるもので足の踏み場もない星の土地。草に立ち、お金を握りしめて、そして。

・洋梨 またら（群馬県）

そこに小川があれば  
どんなものでも

苗字にはなる

川の横に住めば横川、近くに田んぼを耕せば川田。ひとつの水源があればいくつもの集落を生む。苗字は自分がひとりきりでないことを思いださせてくれる。

・松本 幸大（埼玉県）

冬枝に茶色

手折って、淡緑

を見てしまいました。

冬の枯れ枝のなかは春への助走に色づきはじめている。句点の告白には、木の内側の色をはからずも覗いてしまったあざやかでみずみずしい動揺がある。

・武井 まどか（長野県）

さようならカーテンはそのままに  
してゆきますねただし閉じ方で

馴染んだ部屋の、慣れ親しんだ二人の関係のカーテンを閉じる。人との正しい別れ方が存在しないように、きちんと閉じたはずの隙間にときおり陽が漏れる。

・古林暁（神奈川県）

もういいよ

踏んづけた鳩も蘇る

もういいよ。許しの言葉とも、手放す言葉とも聞こえる。死んでしまったと思っただ鳩がふたたび飛び立つような奇跡はどちらの意味から生まれ得るのか。

・小里京子（北海道）

まぶしいね夜は神社にかけるもの

ふろしきのような夜の一枚布をかけ忘れた神社はとても眩しいという。私たちの途方もない願いや祈りをしばし覆い隠して、おとなしい夜は訪れる。

・碧川 春（大阪府）

包丁が生み出す螺旋

梨を剥く手は止めずこれからの話

すらすらと螺旋を描いて伸びてゆく梨の皮は、これから私たちがのぼってゆく階段にも似ている。手を止めたとき、その足場もまた見失ってしまいそう。

・檜野 美果子（宮城県）

子の熱を謝る数の冬董

早退を職場に謝る。預けている施設に謝る。うつしてしまったかもしれない周囲に謝る。頭を垂らして咲く冬董の後頭部にはすこし早い春の陽が射している。